

林文子先生を偲んで

友 林文子さんを語る

今井田 二三子

林さんと行動を共にするようになったのは何時の頃からだったのでしょうか、入学して間もなく女子医専の存続が云々されるようになり、不安の思いにかられる私達の中で林さんの意見の中に大人を感じました。その後、女子医専存続の陳情団のクラス代表として上京される頃はまだ遠くの人であったように思います。

二年生の時、秋の運動会の假装行列を無断で私達はぬけだし、長良川の堤に寝そべり、高く澄んだ秋空を眺めながら林さんの女学校時代の友達のプロフィールを独特の語り方で聞いた頃には教室の座席は隣、授業をぬけだすときも一緒だったように思います。抜けだして訪ねる先の多くは困っている人、悩みを抱えている人の処であり、それも私達よりかなり年上の人々であるのに驚いたのを覚えております。すでにその頃から人間林さんの心は定まっていたように思いました。

私も林さんのお陰で今日がある一人なのです。結核で入院中の私のところへ林さんは毎日のように例の笑顔で買い物、食事の世話を訪れてくれました。病いと、学校とクラスからの疎外感に悩む私にとりましてそれは天使の訪れのように思われました。その間の何回かは授業をぬけだしてであったことに後から気がつきました。林さんにとって学ぶということは林さんの人間性をもっているかにより多くの人に尽くすか、その段階の一つであるように感じました。学生時代、研究時代、そして教授時代、全く一直線の生き方であったのを感じました。

去年の七月頃の電話のとき「どう」と申しました曖昧な私の言葉に「まあまあね」との返事のあとつづいて「生命はわからないよ、与えられている間、やれることをやるだけ」と淡々とした言葉が返ってきました。今、日がたつごとに言葉の重さと、深さをひしひしと感じます。もし許されて私も何日の日か天界に赴くことができれば、必ず林さんを見つけだしてまた後をついて動き廻ることだろうと思います。

(内科開業医)